

リレー訪問 農場に勤める

誇りと夢

第6回：農業の実情を世間に伝える…の巻

各地の農場には優秀な若手が勤務している。数ある職場のなかで、農場に勤めることを選んだ彼らは、農業や勤める農場をどのように見つめ何を感じているのか。リレー訪問第6回は、前回に引き続き、(株)ピーチ専科ヤマシタに勤める吉野友裕氏と(有)アトップに勤める中村敏三氏の対談を紹介する。

吉野 中村さんは、工業出身とうか



今月のゲスト

中村敏三(41歳)

出身：静岡県浜松市
所属：農業生産法人
(有)アトップ
雇用形態：社員
備考：高校卒業後、自動車メーカーの製造工場に勤務。その後、産業機械の設計に携わる。1998年就農。現在、営業部に所属。



今月のホスト

吉野友裕(28歳)

出身：東京都日野市
所属：(株)ピーチ専科ヤマシタ
雇用形態：社員
備考：玉川大学農学部卒。2001年長野県のリンゴ園に就農。翌年岡山の農園に転職。2003年(有)ピーチ専科ヤマシタに転職。主にブドウと桃の栽培管理を担当。

がいましたが、就農してみても農業の印象はどうでしたか。

中村 農業には他業種から人を入れるたがらないような、閉鎖的なところがあるように思いますね。個々の農家がお互いにライバルとして切磋琢磨しているわけですので、そういった反応になるのも仕方ないのかもしれないですねが……。

吉野 私も、もともと農家でないところからの就農ですが、確かに閉鎖

的な感じはありますね。私自身についても、今の会社で働いているからこそ、地域で認めてもらえている部分があるように思います。

中村 どうしても若い世代と今までの世代の農業にはギャップがあるんですよね。例えば、農地の取得も難しいです。代々農家をやってきたところは、赤の他人にまかせるといって、血のつながった誰かに継がせたのが本音でしょう。その思いもわ

かりますが、このままでは、農地は個人資産ですので、土地の取得が困難なままです。農地法を改正して、やる気のある若い人に、スムーズに農地が提供されるようにしていった方がよいのではないのでしょうか。

吉野 同感です。これまでの農業を見直して改善してほしいところはいろいろありますね。

中村 農業をやりたいという人に対して、あまりに閉鎖的だと、さらに後継者が不足する状況にもなりまじし、結果的に産業として農業が生き残ることも難しくなると思います。むしろ、地域の人などで協力しあって新規就農者を助けるくらいの方が、農業を発展させられるように思います。

吉野 そうなってくると就農希望者も増えてくるでしょうね。

中村 それと、従業員の採用を担当して改めたい気付いたこともあるんですよ。私がそうだったように、一般には、農業といえば栽培というイメージですが、農業法人では分業化も含めて、より企業化していく方向に進んでいます。ここで、農業法人と就農希望者の間で、農業に対する認識にズレが生じています。農業法人の内情がこれまでの農家と違うということが、一般の人にはまだまだ伝わっていないんですね。

吉野 実際、面接するときにはどのように対応しているんですか？

中村 面接の際は、うちは分業化していて、栽培に携われないかもしれないことを隠さずに伝えます。それでもいいのかわからない。「それでもいいからやりたい」という人なら、入社後に「こんなはずじゃなかった」と思うことは少ないでしょう。

吉野 就農希望者の大半は、面接で初めて農業法人がどうなっているのかわかるんでしょうね。

中村 そうですね。場合によっては、面接の前に、まず半日くらい見学してもらって、農業法人の概要や仕事内容などを説明します。そして、果樹や酪農の場合では、うちとはまた違うよということなどを説明して、農業にもいろいろあるんだと伝えるわけです。最初は、ここまでで帰ってもらいますが、ここまででわかった上で、「やはり農業がやりたい、野菜が作りたい、アトップに勤めたい」という思いがあるなら、後で面接に來なさいと伝えていきます。

吉野 それでやりたいという人はいたんでしょうか？

中村 ここ数年こういったやり方をしているのですが、この説明をした後で連絡がきたことはないんですよ。やはり、就農希望者のほとんどがガーデニングの延長気分なんじや

ないでしょうか。そういった人に農業の現場の状況が伝わってないから、就農するとおかしな話になってしまうんだと思います。

吉野 当社の場合、独立希望者は最低2年は勤務するという条件で採用していますね。1年では、農業が絶対にわかりませんよ。おっしゃる通りに現場をまず知るところが大事ですよ。

中村 どこもこうした説明をしていないようなんですね。異業種から転職した私もそういったことを感じたので、就農希望者には、ウチに入るかどうかの話ではなく、「農業法人にはどんなところがあるのか、そのリストはどこで手に入るのか」といったことも含めて、手とり足とり説明するわけです。

吉野 一般的に、仕事というものは分業化されていて、就職を希望する人はそのなかのどの役割をしたいかで、職業を選ぶわけじゃないですか。

農業は栽培以外にどんな仕事があるのかわからないから農業をやりたいと思っただけでも、当然イメージと違ってしまうことになるわけですよ。それに、体力的にもきついなと、辞める人は多いですよ。独立を考えると、農地の取得といったことのハードルも高くて、農業は嫌いになっただけで挫折させ

られてしまうのではないのでしょうか。それでも農業をやりたいのなら続けなければならぬのでしょうか……。

中村 そこに、独立して農業をやるのか、農業法人に勤めるのかの違いがあるのではないのでしょうか。どうしても農業がやりたいと言って、続けられるような人は、本来、独立向きの人なのかもしれないですね。また、分業化されている会社であれば、たとえ農業自体にそれほど興味がない人でも、得意なことを活かせる仕事がある中で見つかることもあつた。あらゆる作業を1人の人間だけでやるのは大変ですし、一職業として農業をとらえる人にとっては、人もいて機械もあつてというところやつた方がラクなはずですけどね。そういうえば、ピーチ専科さんでは、独立の支援もされているそうです。が、農地の提供もしているのですか。



代表者

農業生産法人 (有)アトップ

徳井厚夫氏

ハウスメロンを10年生産した後、1984年、仲間とアトップ営農組合を設立（86年法人化）。100%借地経営で栽培規模を10.3haまで拡大し、「葉ネギの専門メーカー」として全国でもトップクラスの生産規模を誇る。2000年、農業生産法人として全国で2番目にISO14001の認証を取得。年間出荷量約300t。（HP：<http://www.jade.dti.ne.jp/atop/>）

吉野 いえ、農地の提供はしませんが、独立した人のなかには、うちの会社に入ったことで、地主の信用を得ることができたのか、運よく農地を借りることができた人もいます。ただ、1年ほどで突然やめてしまいました。その農地は、会社で引き継いで借りている状態です。こういったことが頻繁に起こるようなら、新規の人に対して地主も慎重になり、より農業界に入りづらい状況になってしまおうと思うんですけどね……。

中村 そうですね。その点でも農業の現実をもっと世間に伝えていくということには意味があると思います。また、従業員にもこうしたことをきちんと伝え、それぞれの役割を認識してもらうことで、より仕事に打ち込める環境を整えていければいいなと思っています。（まとめ・高橋瑞穂）